

小岩の歴史

題字・イラストレーション 市川興一



163

桂由美

(ブライダルファッションデザイナー)

幼少からの住まいは
母が小岩で始めた洋裁学校。
住み込みの生徒が何人もいた



1930(昭和5)年東京都生まれ。共立女子大学卒業後、フランスへ留学。64年、日本初のブライダルファッションデザイナーとして活動を開始。93年外務大臣表彰、99年東洋人初のイタリアファッション協会正会員となる。03年からは毎年パリコレに参加。『桂由美MAGIC』など著書多数。

生家は東京の東側、小岩駅から一キロぐらい離れた、江戸川沿いにあった一軒家です。当時の小岩は新興住宅地で、田んぼばかり。近くに松が有名な善養寺というお寺があつて、そこでよく遊んでいましたね。間取りはあまり覚えていませんが、母が居間の八帖ぐらいの畳の間に長机を置いて、近所の人たちに編

み物を教えていたのを覚えています。父は逓信省(後の郵政省)の役人でしたが、私が幼い頃はちょうど今と同じ不景気で、気のいい人なので、家には、慶応や早稲田を出たばかりの親戚が居候していましたし、福岡の実家の新聞社が倒産した折には、祖父母を小岩に呼び寄せ、同居していまし

た。宮城県の工務店の長女だった母は、泣く泣く進学を諦めた経験があるので、私と三歳下の妹には高等教育を受けさせたかった。でも居候もいるし、夫のサラリーだけではやっていけないと思つたみたいで、自宅で洋裁と編み物を教えることを思いついたんです。向学心があり、父と結婚

後、文化服装学院で洋裁を学んでいましたから。

ブライダルファッションデザイナーの草分けとして、「ブライダル」という言葉を定着させ、日本の婚礼文化に新風を吹き込んできた桂由美さん。

鉄道郵便の仕事をしていた子煩悩で文学青年の父と行動力があり活発な母のもと、一九三〇年に誕生。時はいわゆる昭和の大恐慌。「大学は出たけれど……」が流行語でもあった。

母が変わっていたのは、お茶の水にある主婦の友社から毛糸をもらってきて生徒に編ませ、編んだものを主婦の友社に納め、お金を貰つてみんなに分けていたこと。生徒た

ちは編み物の技術を教わりながら収入も得られるというので、だんだん人数が増えていったんですよ。それで手狭になり、七歳の時に小岩駅のそばの二十五坪ほどの一軒家に引越しました。その場所が今、妹が理事長を務める東京文化デザイン専門学校。

家には、内弟子のような生徒が多い時には十人くらい住み込んでいましたから、家族だけで生活していたのは生家のみ。戦争中は、母が看護婦さんの白衣や軍服を縫う軍需工場の指定を取つたので、千葉県の村長さんや校長先生のお嬢さんたちが家に来て、裁縫を習っていましたね。男女交際の面でも母が見ているし、行儀作法も習えるから色んな意味で安心だったんじゃないですか。

戦争を含め、二回死にかけたけど悲惨だと思つたことはなかった

桂さんが十一歳の時に太平洋戦争が勃発。戦争中は疎開が嫌で、「男が生まれただんだと思つて」と母親を説得し、小岩に留まった。

当時の私は軍国少女で、「なぜ女性は特攻機に乗れない

んですか？」という血判状を陸軍大臣宛に送つたほど。あの四五年三月十日の東京大空襲の翌日は、学徒動員先である芝浦の沖電気へ向かいまして。級長をやっていたので、友達の安否も心配で。でも電車が新小岩から両国まで不通

